

間の都市

間で結ばれた集合住宅モデル

指導教員 吉松秀樹 教授 印

6AEB3129 八木 優介

■問題意識 「東京の離散連続性」

東京とは特徴あるエリアが高密度に離散し連続している。それ以外の場所は人々に意識されず、あってなきものであり、隔たれているようで結ばれているという関係をつくることで都市体験を豊かにしている (Fig. 1)。



■目的 「間に構成される」

Fig. 1

この体験は日本の概念の「間」によるものであると考え、「間」を用いることで新たな都市を生み出す手法の呈示を目的とする。住宅地を対象にこの手法が展開し得ることを提案する。

■分析 1 「2つの間」

「間」は、太鼓の間など時間意識の間と隙間など空間意識の間とがある。時間意識の間は太鼓の拍子と拍子のあいだのように、隔たれているようで結ばれている。これは空間意識の間にもいえる (Fig. 2)。



Fig. 2

■分析 2 「間の不規則性と非対称性」

「間」は、空白で生まれるものである。ゆえに不足であるということ、完全ならざるものの美である。「間」はリズムやタイミングのずれを喜ぶ不規則性 (Fig. 3) が加味されているという。

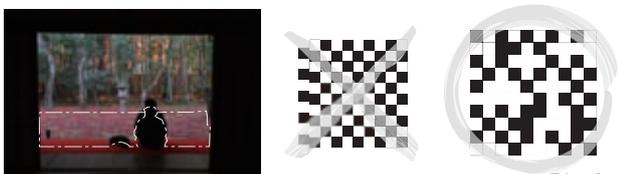


Fig. 3

■手法 「間取りの再編成と付加」

まず間取りを機能単位で切り刻み分ける。次にそれらのピースの機能に必要な「間」を付加する。こうして間取りを再編成する (Fig. 4)。



Fig. 4

■都市・建築 「住宅地に応用する」

このような手法により住宅地の再編成を行なう。「間」を用いることによって塀や壁の必要性がなくなり、隔たれているようで結ばれている関係を生む。「間」の特性を応用した新たなアーキタイプとなる。都市の隙間から少しずつ発生・増殖し、ゆるやかに派生する建築である (Fig. 5)。

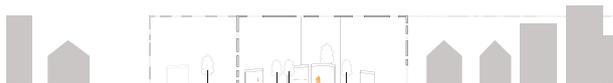
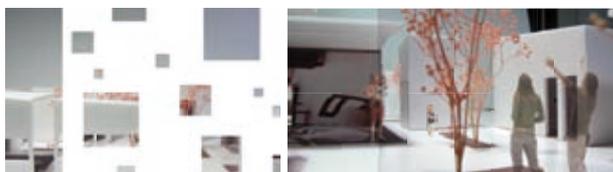


Fig. 5

■結果 「間から見出された都市」

この建築は建ち並んでいくことで次々と「間」を生み出しながら、都市更新を行ない、「間」の都市を形成する。日本の「間」という概念を生かしながら、新たな都市へと変容する。